第 1 節　階層と階級

社会科学における階層研究とその批判

第1項　社会科学における階層研究

日本の教育社会学などを事例として

周知のように、ラボヴ派の「社会言語学」（変異主義社会言語学; “variationist” sociolinguistics）は、古典的なかたちでは、「黒人英語」（Black English Vernacular, BEV; 現在は、普通、African American Vernacular English（AAVE）、「アフリカ系アメリカ人俗語英語」などと呼ばれる[3]）の談話のパターンの調査などに加えて（Labov, 1972b）、主に統計調査に依拠しながら、①音声（異音; allophones）、語彙、統語などの言語的な範疇と、他方、②（年収、本人や親の職業、学歴、居住地[4]、そして家の資産価値などで計量・範疇化された）社会経済的階級（Ash, 2002: 407-409）、ジェンダー、エスニシティ、地域性など社会的な範疇、これら両者の間の統計的・蓋然的相関――つまり社会方言や地域方言の示す一特性――に焦点を当てて、言語変種と言語変化の問題を扱ってきた[5]。

3　巻末注1参照。

4　「階級都市」としての東京を調査・分析した橋本（2011: 252; 2021: 36, 304-307）が論じているとおり、居住地は、ブルデューが「社会空間」と呼ぶ階級構造の地理的な現れであると解することができる。つまり、居住地は、社会経済的・政治経済的な階級構造が地理的に顕在化したものとして捉えられうる。

5　ラボヴ派による「社会言語学的パターン」の探究に関して、マクロなパターン=規則性の実体化、特に、社会経済的な範疇の指標となる諸変数の区分け=グルーピングや重み付け（weighting）の設定に見られる、発見されるべきパターンの実在を前提とした「恣意的な」操作ともいえる取り扱いについては、当然、多くの批判が投げかけられてきた。これに対して、たとえば、ラボヴ派に属するGuy（1988: 43）は、このような取り扱いは、言語的変異の主要な社会的相関物を探究するため

以下に見るように、これらの社会的な範疇のそれぞれに関しては、古典的な社会言語学におけるその扱いについて、さまざまな論議が為されてきた。特に古典的なラボヴ派の社会言語学的研究にいう「社会経済的階級」に関しては、それが、第二次大戦後のアメリカやイギリスの（構造）機能主義社会学の伝統に無批判に従うものであるとして以下に紹介するような批判が投げかけられてきた。

しかし、ここではまず、「社会経済的階級」は、実際の社会における言語使用とは、あまり強く結びついていないという点について確認しておくべきだろう。すなわち、ラボヴ派（変異主義）の社会言語学者ウォルフラムなども論じているとおり、社会的言語使用に相関するのは、主に、（経済的変数であると見なされた）階級というよりも（より象徴的な性格の強い）地位／ステータスであること、したがって、象徴の問題を正面から扱おうとするウェーバーやブルデューの社会学の方が、機能主義や古典的マルクス主義の社会学よりも（ラボヴ派、あるいは非ラボヴ派の）社会言語学的な調査・研究の適切な枠組みとなりうることを注記する必要がある（Grillo, 1989a: 153）。よって、以下、ウェーバーの階級／地位集団論を、竹ノ下（2013: 21-23）や片岡（2019: 95-96）による要約に基づいて最初に簡単に概観しておこう。

ウェーバーにとって**階級**とは、社会において稀少で価値があるものとされる経済的、文化的資源、すなわち社会的資源=財へのアクセス（つまり、生活機会／ライフ・チャンス）という点で類似した状況にある人びとの集合を意味しており、また、その内部では個人の移動が（階級間の移動に比べて）容易

の「賞賛すべき試行」を表していると弁明している。

なお、基本的に同種の恣意性は、日本の教育社会学などを含む計量的な社会科学一般に看取されるように思われる。そこでは、（しばしば、分析対象の実体性と同一視されがちな）統計的な有意性・明晰性を獲得することが望まれ、いわばその代償としてカテゴリーの内包・外延を大きくする方向で――法則定立科学的な方向で――少なくとも、ある程度の恣意性を伴ったカテゴリー操作が為され、その結果、一個のカテゴリー内に包摂される分析対象間の異質性が自然と上がり、社会分析の精度や妥当性も下がってしまうリスクに対する注意が十分に払われていない状況があると思われる。

で典型的であることも階級の成立要件であると捉えられている。（さらに階級は、強い意味で「実在的」なものとしてではなく、財へのアクセスをめぐる確率や生活機会の有り様として、社会学的な分析の俎上に上るものと見なされている。）他方、ウェーバーは、社会の中の不平等（つまり生活機会や生活様式における差異）を作り出す、（財に関わる）階級とは異なるもう1つの次元として**地位**集団（資格集団、ジェンダー集団、人種集団、宗教集団などの**ステータス**／身分集団）――すなわち、普通は、ある種の共同体としての機能を持ち、その地位に伴う社会的名誉や威信によって差異化されている集団――についても理論化している。別言すれば、階級が、経済や市場状況との関係、あるいは物・商品やサーヴィスへのアクセスによって決定されるのに対して、地位集団は、特定のライフ・スタイル、生活様式（あるいはハビトゥス）によって代表されるような物・財やサーヴィスの消費・使用の仕方によって階層化（あるいは差異化）されると捉えられている。このようにして、ウェーバーの社会（階級・地位）分析では、客観的な財へのアクセス（**生活機会**）に関わる社会階級と、他方、特定の地位集団に属する者たちの主観（意図）交じりの集合的行為（**生活様式**）という2つの次元が措定されている。

以上のような枠組みに則れば、社会言語学的な現象が一義的には（非言語的な）財へのアクセスではなく、相互行為に関わるものであるかぎり、生活様式という集合的行為に関わる地位（集団）の方が階級よりも社会言語学的調査研究との適合性が高いというウォルフラムの主張は、いわば当然ともいえるだろう。

しかし、「階級」や「（地位）階層」ということばの語用論的な意味（用法や含意・共示も含む）は、上のような意味論的な弁別だけに基づくものでは、もちろん、ない。特に英語圏などでの社会科学におけるclassやsocial stratificationの用法と日本の教育社会学などの社会科学での「階級」や「階層」の用法との間には社会学的志向性や政治的イデオロギーに関わる屈曲が見られるなど、複雑な様相が看取されている[6]。実際、ラボヴ派のいう「階級」（class）は、日

6　そもそも、「階級」、特にマルクス主義のような近代ヨーロッパの社会思想で展開されてきた意味での「階級」とは異なったものとしての「社会階層」についての